草の根福祉, 第31号, 2001. pp.141-149.

障害理解教育の模擬授業経験学生の意識

近　澤　真　由
(知的障害者通所授産施設第二あじさい園)
真　城　知　己
(千葉大学教育学部障害児教育学講座)

1．問題と目的

これまでに行われてきた障害理解教育では、主に視覚障害や聴覚障害、運動障害といった身体障害者に関する内容がとりあげられることが多かった。これは、これらの障害が「障害者」としてのイメージを持ちやすいことや、学習者に対して疑似体験をさせやすいことなどがその理由であろう。

これに対して知的障害や自閉症といった障害に関する場合には、疑似体験の困難さや障害像のイメージのしにくさから、障害理解教育ではとりあげられにくかった。

しかし、たとえば学校教育の範疇で行われる交流教育などで児童生徒がもっとも接触する頻度が高いのは、知的障害や自閉症をもった子どもたちである。接触する可能性が高いにも関わらず、こうした子どもたちの「障害」や様子について適切に理解するための働きかけが少ないのは大きな問題であるといえよう。

知的障害や自閉症の子どもが見せる様々な特異的な行動に対する周囲の適切な認識や態度が形成されていないために、当該の子どもが「問題行動のある子」や「おかしな子」とみられて学級集団の中で疎外されたり、いじめの対象となったり、あるいは「お客様扱い」されてしまうなど、望ましい人間関係をつくることができない事例は数多い。

とりわけ知的障害や自閉症などは、他者との意志の疎通における困難があることに加えて、周囲の子どもが「理解できない」ような行動があるために、大きな不利を被っていることが多く、適切な知識や関わり方の姿勢を周囲の子どもに学習させることがきわめて重要な課題となっている。この点において、知的障害等を取り上げた障害理解教育が大きな役割を担う必要があるといえよう。

さて、実際の知的障害等を取り上げた障害理解教育の実践のためには、障害やそれをもつ子どもの様子について理解させるための様々な工夫が求められる。

障害理解教育においては、単に子どもの「障害」について理解させるだけでなく、偏りのない意識の涵養、正格な知識の獲得、そして適切な行動の育成などがその要素として重要となってくる。また、「障害」をもって学校や家庭での生活の様子についても理解が必要である。これは、「障害」に対する社会的な視点を子どもたちに学習させ

る必要があるからである。このように障害理解教育には多様な学習内容が要素として含まれることになるが、いずれの面に関しても知的障害等を取り上げる場合には、適切な学習教材の選定や取り上げ方が問題となる。

こうした課題に対して児童文学作品の利用の有効性が知られている。その理由は児童文学作品が備えている「子どもの心情に即した描写」「子どもの生活世界に密着した内容」といった性質があることから、内容が子どもにとって具体的に理解しやすいためである[1)]。

とくに小学生を対象にする場合などには、こうした児童文学作品は様々な場面で利用することが可能である。たとえば、「国語」の教材として、「道徳」の参考図書として、夏休みの読書感想文の課題図書としてなどの利用が例としてあげられよう。

このように児童文学作品は子どもたちに対して利用しやすいという長所を備えている。

実は、あまり知られていないが、児童文学作品の中には知的障害をもつ子どもが登場する作品も少なくない。この中には「兎の眼」のような有名な作品もあるが、いずれも子どもの視点から物語が展開されており、知的障害をもつ子どもの「障害」や様子について理解したり考えるきっかけを作る素材として大変に優れた作品が多い。

そこで本研究では、児童文学作品を利用した障害理解教育について、その可能性を探ってみたいと考えた。具体的には、将来、小学校や養護学校の教員を目指す教員養成課程の学生を対象にし、児童文学作品を利用した障害理解教育の模擬授業を計画・実施する経験をさせ、そこから知見を得たいと考えた。

今回は、特に模擬授業の計画・実施を経験する中で、何を学習したと感じたのか、授業に参加しながらどのようなことを考えたのか、そして今後さらに学習したいことはいかなることなのかの3点に焦点をあててみることにした。

2. 方　法

1) 対　象

2年生を中心とした教員養成課程の1年生～4年生及び特殊教育特別専攻科学生。本稿でとりあげる調査への協力者はそのうちの40名であった。

2) 模擬授業の計画と発表の流れ

以下の講義計画にしたがって模擬授業計画に取り組ませた。

a. 「障害」及び「知的障害」の理解のための授業の実施

b. 児童文学作品に関するレポート（その1）

c. 模擬授業のグループ分け

d. 模擬授業の計画

e. 各グループごとの模擬授業の発表

f. 模擬授業に関する調査と授業に関するレポート

g. 受講の感想

h. 児童文学作品に関するレポート（その2）

まず、障害理解教育のための基礎知識の学習のために毎週1回の講義を約2カ月にわたって行った。そして、学生に児童文学作品を読ませて（作品の選択は各学生の任意）、それに関するレポートを提出させた。模擬授業のためのグループ分けは、提出された児童文学作品に関するレポートの内容を参考に、一つのグループの人数がおよそ6～8名程度になるように調整した。模擬授業の準備には次の2カ月間をあてた。受講生がまだ教育実習経験の浅い学生たちであったことから。模擬授業は「小学生を想定して」行うこととし、発表しているグループ以外の学生が「児童になりきって」授業を受ける形式とした。したがって、すべての学生が模擬授業を「する側」と「受ける側」の経験をした。取りあげられた作品は「兎の眼（作者名　灰谷健次郎）」、「ぼくのお姉さん（丘修三）」、「ヒルベルという子がいた（P. ヘルトリング）」などであった。1回の授業時間に2グループずつ（各45分）の発表を行った。毎回の模擬授業後には、発表についての感想（特に発表を受けて伝わってきた内容）を全員に記述してもらい、翌週にそれを集約したプリントを配布して受講生にフィードバックするようにした。すべてのグループの発表が終了した後、模擬授業全体に関する調査、及び受講に対する感想についての調査を実施した。さらに、次の学習につなげるために再度、児童文学作品を読ませてレポートを提出させた。

およそこのような流れによって障害理解教育の模擬授業への取り組みを実施した。

本稿では特に「受講の感想」の内容についてとりあげ、将来の障害理解教育の実践の担い手となる学生たちの意識について報告したい。

ここに焦点をあてた理由は、知識や客観的な理解の程度を問う質問項目よりも「感想」の方が各学生の主体的な意識が明瞭に反映されると考えられるからである。

3）分析の視点

分析の視点としては次の3点をとりあげた[2)]。

a. 模擬授業実践を通じて学習したと考えていること

b. 授業に参加して考えたこと

c. 今後さらに学習したいこと

3. 結果と考察

1）「模擬授業実践を通じて学習したと考えていること」の内容

今回の模擬授業実践に関する授業の受講をふまえて、特に学習したと考えている内容についてたずねた。回答の概容を〈表1〉に整理した。

〈表１〉　模擬授業実践を通じて学習したと考えていることの内容

カテゴリー	具体的な記述例
障害理解教育実践の難しさ(12)	・考えていたより障害を子どもたちに伝えるのは難しいと思った ・障害理解教育は簡単なことではないと思った ・障害というものをどのように伝え、理解を促すか、その実践を模擬授業を行うことで伝えることの難しさを学ぶことができた
障害理解教育の意義や内容の理解(10)	・障害理解教育の大切さや奥の深さ ・障害「者」理解ではなく「障害理解」だということ ・伝えなくてはいけないこと、伝える方法がたくさんあること ・障害者に対する意識と行動についていろいろな考え方を知ることができた ・障害についての見方がいろいろできるようになった ・障害理解における「意識」「知識」「行動」に関する要素を知った
授業の方法･実践に関する内容(8)	・障害理解教育についての実践の仕方 ・障害の認識を他の人にどうやって伝えたらいいかということ ・障害に対する知識だけでなく、それをどう伝えていくか
「障害」の社会的規定因への視座(5)	・障害児（者）をとりまく環境によって“障害”が作り出されているんだなということ ・周りの環境、接し方で「障害」が軽くなったり重くなったりする ・周囲の現状、周囲のとらえ方が大切なこと ・社会環境の大切さ

〈表1〉では、回答を4つのカテゴリーに整理することができた。

もっとも多かったのは「障害理解教育実践の難しさ」であった。ついで「障害理解教育の意義や内容の理解」、「授業の方法・実践に関する内容」、「『障害』の社会的規定因への視座」の順で回答が多かった。

「障害理解教育実践の難しさ」は、自らが授業者となる経験をすることによって、伝えたい内容を相手に理解してもらうことがいかに難しいことであるのかを知ることができたという内容によって構成されている。

これは単に授業を行うことの未熟さに理由があるというよりも、模擬授業において知的障害に関する内容を「相手に伝えること」そのものの難しさが強く意識された結果であると考えられた。

授業の中では学生に対して様々な具体的な授業方法についての説明ばかりでなく、「自分が伝えたいと思うことを明確に意識するように」との点を繰り返し強調し、模擬授業の計画に取り組ませたが、それでも「十分に伝えられなかった」との感想が各模擬授業の後にたびたび聞かれた。こうしたことからも、ここでの回答の結果は、知的障害等について取り上げて理解させようとする実践が簡単には行えるものではないことがしっかりと意識されるようになったことが反映されていると考えられた。

ついで多かった「障害理解教育の意義や内容の理解」では、障害理解教育の奥の深さや伝えなければならない内容が多いことなどが自覚されていたことがわかる。

「授業の方法・実践に関する内容」としてあげられたものは、「障害に対する意識だけでなく、それをどう伝えていくか」といったように授業実践の方法について学んだ

ことがあげられていた。

さらに、「『障害』の社会的規定因への視座」について学習したと述べた学生もいた。たとえば「障害児者を取り巻く環境によって『障害』が作り出されている」ことや周囲の環境や接し方で「障害」の程度が影響されることを学習したと振り返っていた。

ここでは障害理解教育についての基礎的理解のもと、自らが模擬授業を計画し、また他のグループの発表を児童になったつもりで受けることで学習した内容が各学生に明確に意識されていたことが理解できた。とりわけ、障害理解教育の意義についてしっかりと意識することができたとの回答や、実践の難しさを学習したとの回答が多かったことは、模擬授業の形式にしたことならではの効果があったと考えられた。

2)「授業に参加して考えたこと」の内容

自分自身での模擬授業の発表や他のグループの模擬授業への参加を通じて考えたことの内容についてたずねた。回答の概要は〈表2〉に示した。

〈表２〉　授業に参加して考えたことの内容

カテゴリー	具体的な記述例
障害理解や「伝えること」の難しさ(10)	・障害を理解するのは本当に深くて難しい。 ・授業は難しかった。私の浅い知識では追いつかない。情けないと思った。 ・知的障害を子どもに伝えることの難しさ。 ・障害について相手に伝えることは難しく大変だと思った。障害についてもっとたくさん考えてみなければ誰かに教えることはできない。
障害に対する自身の意識への気づき(5)	・子どもたちに障害の理解を伝える前に自分がいかに障害者に差別的目を向けていたかということに気づいてぞっとした。 ・「障害」に対して知識だけでなく、自分の意識を見直し、深めることができました。 ・私自身が障害をどうとらえていたかを考えました。 ・私は「この人には障害がある」と意識するとどうしても遠慮がちや保護的になりがちでした。けれど、それはその人にとって失礼なことであり、心の浅いところでしか通じていないような悲しいことでもあったんですね。今ごろ気づいたけれど、これからに生かしたいと思います。
障害理解教育の授業の方法について(5)	・障害を伝える方法はとてもいろいろあると思った。 ・子どもに対して知識を植え込むのではなく一緒に考えることが大切だ。 ・４５分の授業で伝えようとすることが多すぎて粗い内容になっているものが多かったが、視点を絞るということが重要ではないかと考えた。
障害理解教育の必要性の認識(4)	・障害理解教育の大切さを考えた。 ・自分自身が小中学生の頃に何も障害理解教育を受けてこなかったことは問題だと感じた。 ・子どもの頃から障害理解教育や障害のある子と接していけば特別視というものはなくなるのだろうなあと思った。
障害と周囲の関わりへの気づき(4)	・まだまだ自分も周囲も障害を理解するだけの情報と知識がないと思った。その分、障害を持つ人はしなくてもいい大変な思いをしているだろう。 ・大人が心の中に偏見を持っているから（いつの間にか子どもに伝わって）子どもも偏見を持ってしまう。 ・周囲が自然に手をかせるようになれば「障害」は軽減していくのではないかと思った。
障害理解教育に利用できる児童文学作品について(3)	・児童文学作品は子どもだけでなく私にとっても学ぶことがあると思うのでいろいろ読んでいきたい。 ・障害理解教育のためにたくさん本がある。それらは主題によって分けられる。これをうまく使って自分も子どもたちもいろいろ学ぶべきだと思った。 ・授業をするとしたらどうするかを考えながらたくさんの児童文学作品を読んでみたい。
その他(3)	(講義への感想ほか)

「授業に参加しながら考えたことの内容」は、多岐にわたっていたが大きく7つの内容に整理することができた。

もっとも多かった内容は「障害理解や『伝えること』の難しさ」を自覚したという内容であった。この内容は、前項でも挙げられていた内容であったが、模擬授業を経験した多くの学生たちが共通して、障害理解教育を自らが実践することの難しさを感じていたことが理解できた。

また「障害に対する自身の意識への気づき」のカテゴリーには、これまでに「障害」に関する様々な基礎的な意識を得てきたものの、「障害」について深く考える努力が不足していたことを自覚し、見直す契機となった様子が現われていた。障害理解教育の実践のためには、自身が「障害」について深く向かい合い、そして深く考えることが不可欠であるが、模擬授業の計画・発表の過程を通じて「いったい自分は『障害』についてどのように考え、理解していたのであろうか」ということに学生たちが気づいていったのである。記述の中には「自分がいかに障害者に差別的目を向けていたかということに気づいてぞっとした」というものがあったが、これはその学生が障害をもつ人に対して「否定的な」意識を持っていたということではなく、表面的な理解、あるいはステレオタイプな見方しかできていなかった自分の姿に気づいてかかれたものである。ステレオタイプな見方や関わり方が人の「障害」を重くしていること、そしてその重大さに気づいた時、(自分自身に対して)「ぞっとした」という表現になったのであろう。

この他に「障害理解教育の授業の方法について」「障害理解教育の必要性の認識」「障害と周囲の関わりへの気づき」は、いずれも前項でふれた「学習したこと」に通じる内容であった。そこでは障害理解教育において単に知識を伝達するのではなく、子どもと一緒に「障害」について考えていくことの重要性への気づきが表明されていた。

また、ここでは「障害理解教育に利用できる児童文学作品について」の記述もみられた。その特徴は、子どもにとっての作品の価値ばかりでなく、自分自身にとって(すなわち自身の障害理解のために)児童文学作品の価値が見いだされていた点である。「障害」に対する理解が表面的なものであったことへの気づきとともに、子どもの視点にたって「障害」について考えることで、より理解を深めることができたとの意識が反映されていると考えられた。

3)「今後さらに学習したいこと」の内容

今回の授業への参加をふまえて、今後、各自がどのような学習を進めていきたいと考えているのかについてたずねた。回答の概要を〈表3〉に示した。

〈表3〉によれば、今後さらに学習したいことの内容として「障害に関する知識の獲得」をあげた学生が特に多かったことがわかる。これは次のような理由によってい

〈表3〉　今後さらに学習したいことの内容

カテゴリー	具体的な記述例
障害に関する知識の獲得(15)	・障害理解を子どもにしてもらうために自分自身でもっと障害を理解し、適切な環境をつくっていけるようになりたい。 ・自分自身の障害に対する知識をもっと深めなければならないことを強く感じました。 ・今のこの気持ちを忘れず持続して、多くの子どもたちに障害を持つ人たちと心からつながるような考えや行動ができるような実践ができるように学習を深めたいと思います。 ・もっともっと障害に対する知識がほしい。 ・障害児の心情についてもっと詳しく学んでいきたい。
障害理解教育の方法論(7)	・さらにどのような授業方法・教材教具が有効であるのか。どのように伝えていくのか具体的に考えたい。 ・適切な行動を児童にどう伝えるか。 ・小学生に知的障害をどう伝えるか。
障害理解教育に利用できる児童文学作品について(7)	・とにかく障害をもつ子の出てくる文学作品をもっと読みたい。 ・子どもの読みやすい本を見つけて自分なりにどう使って教えたいか考えてみた。 ・もっといろんな児童文学作品を読んで自分なりに障害について考え直してみたい。
障害をもつ人や児童との関わりを通じた経験(7)	・多くの障害をもつ方と関わって自分がどう行動するか考えていきたい。 ・子どもたちがどう接しているのかなどの意識を知りたい。 ・障害者と接する機会に参加して理解を深めたい。
障害をもつ人との関わり方(4)	・知的障害をもつ人とどのように接したらよいかをもっとよく考えたい。 ・障害をもつ子どもへの専門的対応の仕方について学びたい。

ると考えられよう。

模擬授業に関与することで、自身の障害に関する知識の浅薄さや表面的理解にとどまっていたことに気づいていった様子は、〈表1〉及び〈表2〉の結果から読みとることができた。その自覚をふまえて、障害理解教育のためにさらに一層の知識を学習することが必要であるとの意欲を表明した意見が多く寄せられたのであると考えられる。回答には特に自分自身の「障害」についての理解をしっかりしたいとの意識が強く現われていた。さらに、それを将来の実践にしっかりとつなげられるようにしたいとの意欲を示した回答もあった。

また、模擬授業を発表し、また他のグループの発表を聞くことで、障害理解教育において様々な伝え方や主題の設定の仕方ができることに気づき、さらに多くの「障害理解教育の方法論」について学習したいとの考えも表明されていた。

これは障害理解教育の実践の自ら考え、実行しようとすることが大変に難しいことであることが自覚されていたこととの関係で考えれば、「難しさの自覚」をふまえて「どのようにすれば上手く障害理解教育を行うことができるのか」「どんな工夫をすれば上手く伝えることができるのか」という点に、自らの課題意識を向けることができるようになったことが現われていると理解することができよう。

知的障害等に関係した児童文学作品を積極的に読んでいきたいとの意識は、表2と同様に確認された。具体的にどのように使うかを考えながら読みたいとの回答もあった。これは模擬授業を通じて、実践への意欲が高まったことが反映されており、教材としての児童文学作品の利用という教師としての視点も同時に学習していた様子がうかがえた。

今後学習したいこととしてあげられていた内容として「障害をもつ人や児童等の関わりを通じた経験」や「障害をもつ人との関わり方」についての学習を積極的にしていきたいことも複数の回答があった。ここでも自分自身が「障害」についてどのように理解しているのか、考えているのかということについて、さらに深く自身と対峙したいとの意識が現われているものと考えられた。

以上のように、「今後さらに学習したいと考えている内容」の整理からは、障害理解教育はもちろん、その模擬授業への取り組みを通じて、自身の知的障害に関する知識や理解を高めようという意欲を明確に読みとることができた。

4. 小　結

単なる知識の学習にとどまらず、自らが実践を具体的に考える経験は、学生にとって大いに刺激となったようであった。

特に「知的障害の理解の難しさと児童文学作品の利用の有効性」への意識が学生たちの感想に明確に示されていたことは、今後の知的障害を対象にした障害理解教育において児童文学作品の活用を広くすすめていく可能性を感じさせるものであった。

調査結果には多くの学生が障害理解教育の実践が難しいことであると感じている様子が現われていたが、それによって実践への意欲が減退することなく、むしろ、自分自身の知識や理解の不足をしっかりと自覚し、さらなる学習意欲を表明した学生が多かったことは喜ばしいことであった。

特に、「養護学校教員養成過程」に所属する学生ばかりでなく、「小学校教員養成過程」の学生たちにも障害理解教育の必要性や「子どもたちに伝えたい」という気持ちを強くもってもらうことができたことは、障害理解教育の実践の場の中心が小学校や中学校であることを念頭におけば、彼らが小学校教員養成課程の他の学生や、将来、教壇に立ったときに他の小学校の教師にその必要性を伝えていく役割を担ってくれる存在として障害理解教育の拡大に貢献してくれることが期待できよう。

まだ、「障害」に関する知識も理解も十分ではなく、教師になるための学習もその途上にある学生たちであるが故に、授業実践自体の未熟さや障害理解教育の本質につて十分に咀嚼できていないと感じられた点もあったが、彼らがこれから「障害」や障害理解教育についての学習をさらに進めていくにあたって、各自の学習の動機や課題意

識の明確化を図れたことは、今後の学習の上できっと役に立っていくはずである。

また、模擬授業に取り組むことを通じて、障害理解教育の具体的な実践につていっそうの学習意欲を喚起することができたばかりでなく、知的障害に関する今後の学習意欲も高めることができたことは大きな成果であった。

冒頭で述べたように、障害理解教育においては「偏りのない意識の涵養、正格な知識の獲得、及び適切な行動の育成など」が重要な要素となるが、本研究で取り組んだ模擬授業への取り組みに参加した学生たちの意識からは、将来の障害理解教育の担い手としての学生たちが、こうした要素について一定の学習を図ることができたことを確認することができた。もちろん、この前提に「障害」の有無に関わらず、子供同志の相互の関係を深めていく実践が位置づけられていることがいうまでもない。彼らが将来の子どもたちに大きな影響を与える教師となって活躍してくれることを期待して本稿をおえたい。

【注】

1) 山口洋史・山田優一郎偏：『知的障害をどう伝えるか』文理閣、1997年。

2) この3点を分析の視点としたのは「知的障害の理解の難しさと児童文学作品の利用の有効性」への意識がもっとも端的に反映されてくると考えられたからである。

療育等支援事業におけるコーディネーターの実践に焦点をあてて―、大阪市立大学大学院修士論文
白澤政和ら（2001）障害者ケアマネジメントの総合的推進に関する研究、厚生労働科学研究・障害保健福祉総合研究事業・平成12年度報告書
高松鶴吉ら（1995）心身障害児（者）の地域福祉に関する総合的研究、厚生省心身障害研究・平成7年度研究報告書
田中亨（1999）障害児（者）地域療育等支援事業の現状と可能性、AIGO、No.504、21-24.
知的障害者ケアマネジメント研究会（2002）新版障害者ケアマネジャー養成テキスト―知的障害編―、中央法規
福岡寿編著（2002）コーディネーターがひらく地域福祉、ぶどう社
福岡寿（2003）「障害者地域生活推進特別モデル事業」の可能性、手をつなぐ、No.569、32-33.
松下良紀（1999）施設における在宅福祉支援、発達障害白書2000、81-83.
宮田広善ら（1999）障害児（者）地域療育等支援事業の推進方法に関する研究、平成10年度厚生科学研究・障害保健福祉総合研究事業報告書
宮田広善編著（2001）障害児（者）地域療育等支援事業ハンドブック、ぶどう社